

「守破離～卒業式編②～」

校長 江口 満



【前号からの続き】皆さんが入学して一ヶ月が経ち、新しい学校生活に慣れ始めてきた5月、福岡県にも緊急事態宣言が発令された。「私たちは決して立ち止まるわけにはいかない。」このスローガンのもと、本校は生徒の皆さんと「No More Corona プロジェクト」を宣言した。生徒総会で皆さんは、「新しい時代の創造者」として、上級生と校則などを真剣に議論した。

7月、予定していた「ふれあい合宿」が中止になり、そのうっぴんを晴らすかのように、「則松ウォークラリー」を開催。皆さんは元気に学校を飛び出していた。堀川からさつき台、瀬板の森公園までの2時間のコース。皆さんの、パワーに圧倒された一日となった。



12月、一年ふれあい活動の第二弾「門司港フィールドワーク」。門司港周辺の歴史を学びながら「協力とは何か」を追求する活動となった。カメラを向けると各班の団結力がはじけ、今後の活躍がますます楽しみになった。

二年生に進級した皆さんは、コロナ禍の中、新たな一步を踏み出す挑戦の年を迎えた。しかし、感染対策の観点から農村民泊体験学習は断念。その代わりとして、10月、九重キャンプ教室を開催。一



年生で培った団結力で準備を進めた。皆さんは、「久住山にみんなで登ろう。」という、あえて苦しい決断をし挑戦した。そのことが何よりも嬉しかった。

一日目の午後、長者原に到着。湿原を散策する頃から空模様が怪しくなってきた。予報では夕方から雨で、翌日にかけて天気が回復の見込み。登山への期待が高まる。しかし自然

は、時として残酷だ。翌朝、雨はほぼ上がったものの、ホテル周辺は濃いガスに覆われたままであった。N学年主任の勇気ある決断。「安全確保のため出発時間を遅らせ、杵掛山までの行程に変更する。」と皆さんに告げた。

登山の当日。皆さんは、杵掛山までの山道にその第一歩を記した。私は、登頂しようとも、途中で断念しようとも、どちらもかけがえのない貴重な体験であると思う。なぜなら、この二日間、九重の大自然の中で、みんなで時間と空間を共



有したという思い出が残ったからだ。登頂することはその一つの過程に過ぎない。将来、久住山の山頂に立つ日が、また必ずやって来る。九重の山々は、いつでも君たちを待っている。(裏へ)

皆さんが三年生に進級し、本校創立49年目を迎えた。本校は、「守・破・離」の精神で、半世紀の間、本校が受け継いできた伝統を守りながら、新しい工夫を加え、今までの伝統を超える独自の文化を創造する。皆さんは、その節目の年の第一歩を踏み出した。



5月、新型コロナウイルス感染症の位置づけが変更され、学校行事の取組の進捗が一気に加速した。生徒総会では、学校設備や校則などについて真剣にかつ前向きに議論した。またSDGs講演会を受け、PTAと連携した「第5回きずなプロジェクト」を立ち上げ、10月、生徒会代表14名を日田市小野地区、福岡県東峰村と朝倉市高木地区に派遣し、義援金を直接届けるとともに、バザーの特産品を購入した。その後バザーを開催し、文化祭当日、視察した被災地の現状と課題をまとめ、今後の支援活動の在り方を発表した。



6月、修学旅行の団体訓練も本番さながらに過熱。修学旅行の三日間だけピンポイントで晴マークになり、ほとんど雨の心配もない中、出発。新幹線のおやつタイムで一気にヒートアップ。バスガイドさんとの応答で寝る暇もない。奈良公園に到着すると、鹿せんべいのことしか頭にない。しかしその鹿たちが満腹で寄ってこない。学年の一押しの京友禅染め体験学習。カメラ撮影に駆け寄ってくる嵐山竹林の小径。新緑の金閣寺。学年の笑顔がはじけた清水寺散策。



三日間の修学旅行を終え、私の心を満たしたのは「達成感」だった。久住の山頂に立てなかったというあの悔しさがあつたからこそその達成感だ。修学旅行では、修学旅行のスローガン「考」という山頂に立つことができたのだ。嵐山渡月橋にたたずんでいたN学年主任。彼の視線の先には、遠く霞^{かす}んでいたはずの「進路」というひととき大きな頂が、あの日、はっきりと見えていたのかもしれない。



【次号に続く】

